

ふたつの『悪魔の陽の下に』：ベルナノスとモーリス・ピアラ

野村，知佐子
九州大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学

<https://doi.org/10.15017/4752566>

出版情報：Stella. 40, pp.127-131, 2021-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



ふたつの『悪魔の陽の下に』

——ベルナノスとモーリス・ピアラ——

野村知佐子

1987年、第40回カンヌ国際映画祭でパルム・ドールを受賞したのは、モーリス・ピアラ監督による『悪魔の陽の下に』（原作は1926年刊）であった¹⁾。ベルナノスの作品は映像化されることが多い。1951年のロベール・ブレッソン監督による『田舎司祭の日記』を始めとして、1967年には同監督の『少女ムーシェット』（原題『新ムーシェット物語』）、また1970年にはピエール・カルディナルにより『悪魔の陽の下に』がテレビ放送された。『カルメル会修道女の対話』もまた1984年にテレビで放映されている²⁾。このように映像化されることの多いベルナノス作品であるが、本稿ではピアラの『悪魔の陽の下に』を取りあげたい。主演はドニサン神父にジェラルド・ドバルデュー、ムーシェットにサンドリーヌ・ボネール。そしてムヌ＝スグレ神父を監督であるピアラ自らが演じている。同作に対するピアラの愛着のほどが窺えよう。しかしながら、この映画への批評は賛否両論に割れ、授賞式の会場ではブーイングも起こったという。筆者自身は同作を鑑賞したさい、原作と照らし合わせて疑問に思うことがいくつかあった。それについて考えを述べておきたい。

まず1点目はムーシェットの死に方である。原作では、瀕死の彼女がドニサン神父に自分を教会の階きざしのところへ運んでくれるよう嘆願した。それに対し映画では、自殺したムーシェットの遺体をドニサンが教会へ運ぶのである。2点目は、この事件が巻き起こしたスキャンダルのために左遷されたドニサンがムーシェットの幻を見るところである。原作にはないこのシーンは、どのように解釈されるべきなのか。3点目は、告解室のなかで死んだドニサンを誰が見つけたのかということである。原作では、サン・マランという高名な作家が見つける。いっぽう映画ではその役回りは、ドニサンの師ムヌ＝スグレ神父が果たしている。以上の3点は、作品の本質にかかわる重大な改変だと考えられるが、なぜこのような改変がなされたのか。ミシェル・エステヴによると、ピ

アラは「私にとって超自然的なものは存在しません。それには意味がありません」と語ったという³⁾。鍵はこの言葉にあると思われる。ピアラの言葉を上記の改変と関係づけ、必要とあれば他の作品にも言及しつつ、映画が原作から外れていくところについて検証・確認したい。

1点目のムーシェットの死の間接的原因は、ドニサン神父の行った幻視にある。彼は悪魔と遭遇して幻視の力を授かった。その力で、愛人を殺害したという秘密を抱えるムーシェットの魂に寄り添うのである。しかし彼の心は次第に魂を苦しめる悪魔への激しい憎悪へと変わっていく。生命に巢食う悪を破壊したなら、生命そのものも破壊されてしまう。神父の幻視はとどまることを知らず、ムーシェットの祖先の罪にまで遡る。その幻をドニサンと共有した彼女は、自身の実存が生きたまま解体されるように感じる。絶望した彼女は剃刀で喉をかき切る。だが最期の瞬間に神父に助けを求めたのは、彼女の回心の顕れであるといえよう。しかるに、映画のように、肝心のムーシェットが神父の到着前にすでに死んでいれば、彼女の回心どころか、意志の自由さえ問題にならない。神父の幻視の力の正当性も危ぶまれる。そして教会の階へ彼女を運んだ彼の行為も単なる狂気にすぎぬと言えるだろう。

続いてドニサン神父は、左遷されたランブルの村でムーシェットの幻を見る。原作にはないこのシーンは、ドストエフスキーの創り出したスタヴローギンを彷彿とさせよう。幼い少女を精神的に誘惑し、死に追いやったこの悪魔的な人物は以後、少女の幻に悩まされ続ける。彼の持つ輝かしさも、未来への希望も、何もかもが剥奪されてしまう。ドニサンはスタヴローギンとは全く異質の人物である。にもかかわらず、ムーシェットの幻を見つめるシーンでは、彼の姿はスタヴローギンのそれと重なり合うかのようだ。信じることも、信じぬこともできぬスタヴローギンとは違って、原作小説のドニサンは神への愛と、悪魔への憎悪に燃えている。たとえ罪人を前に常に無力感に苛まれているとしても。

そうした状態のドニサンが、死んだ子供を蘇生させてくれるよう懇願される。原作でも映画でも、ドニサンは子供が蘇生しなければ、神に見捨てられてしまうが、映画のドニサンはひたすらその考えに怯えている。かたや原作のドニサンは、子供が蘇ったなら、神の正当性が証明されると信じている。だが同時に、神に正義を求めることは神を試みる大罪であることもまた知っている。い

ずれの場合も、ふたりのドニサンに逃げ場はない。彼らは共に言う。「彼奴かあなたか、どちらが主なのか言って下さい」[276]と。原作のドニサンは、持てるもの全て、自らの救いまでも投げうって神に正義を要求した。それに対して、映画のドニサンは、スタヴローギンのように無力感に潰えてしまうかのようだ。かくてふたりは共に子供を蘇らせることに失敗する。

3点目のドニサン神父の最期を見た者について述べるには、『田舎司祭の日記』(1936年刊)を援用しなくてはなるまい⁴⁾。主人公の司祭が、伯爵夫人の心に死んだ息子を蘇らせた後のことである。あたかもその再生を^{こころ}甦ぐかのように司祭の前に、3人の人物が現れる。まるでキリストの誕生を祝う東方の三博士のように、贈物を携えて彼らは現れる。ひとり目は外人部隊に所属するオリヴィエで、青春の歓びを司祭に教える。ふたり目の町医者ラヴィーユは、胃癌の宣告をすることによって、司祭に死を与える。そして最後の還俗司祭のデュフレティは、もう一度聖職に就くという可能性を見せることによって、司祭に信仰の歓びを与えるのである。

いっぽう子供の蘇らなかったその日、ドニサン神父不在の教会に3人の人物が訪れて来る。無神論者の医師、リュザルヌの司祭、そして高名な作家であるサン＝マランである。子供の蘇生に失敗したとき、まずはドニサンの心臓に鋭い痛みが走る。彼にはそれが狭心症の発作だと分かっていた。だからリュザルヌの医師から死を与えられるべくもない。次にリュザルヌの司祭は、ドニサンが奇跡を起こすことを期待したが、奇跡は起こらず、彼は失望の色を隠しきれない。リュザルヌの司祭を前にドニサンは、ただ自分は狂っていたと思うばかりである。そして、そんなドニサンをサン＝マランが訪ねて来る。年老いてなお享楽を求め、偽りの青春を謳歌するだけのサン＝マラン。真の青春をドニサンに与えることは不可能だ。それら訪問者のいずれもが贈物を携えていない。彼らは東方の三博士のパロディーと見なせよう。このような読み方にしたとえば、『悪魔の陽の下に』では起こりえなくとも、いずれは東方の三博士に匹敵する者が現れるのではないか。まさにその予感『田舎司祭の日記』で成就されるのである。だからこそ、ドニサンの死体を告解室に見つけ出すのはサン＝マランでなくてはならないのだ。『悪魔の陽の下に』は『田舎司祭の日記』に向けて開いたかたちで終わっているとも言えるだろう。

そのサン＝マランの登場しない映画のラストで、ドニサンを訪ねたのはムヌ＝

スグレ神父であった。彼は息絶えたドニサンを告解室のなかに見つける。ここでベルナノスのムヌ＝スグレと、ピアラのそれとを比較してみよう。ふたりのムヌ＝スグレは、どちらも「私が君に期待していることは、君の力を超えた誘惑かもしれんぞ」[132]と、ドニサンに言う。しかし同じ言葉でも、込められた意味は異なる。ふたりのムヌ＝スグレは、ムーシェットの死について違った見解を示す。原作の彼は、ドニサンが瀕死のムーシェットの枕頭に留まることを許す。ドニサンは彼女をその願いに応じて教会へ運び込む。数多くの非難が浴びせられるなか、ムヌ＝スグレ神父はただ沈黙と軽蔑で答えるのみである。彼はドニサンが聖性を担うべき人物であることを信じており、悪魔の存在もまた信じている。そしてドニサンがその熱意のあまり、信仰の歓びを悪魔の誘惑とみなしはせぬかと案じてやまない。それこそが聖人しか経験することのない「絶望の誘惑」であり、ドニサンの「力を超えた誘惑」なのである。

これに対して映画のムヌ＝スグレは、ムーシェットの遺体を教会に運び込んだドニサンに「君は狂っている」と言い放つ。このムヌ＝スグレは悪魔の存在を信じていない。悪魔が存在するという確たる証拠があれば信じるが、それがなければ信じない不可知論者の立場に立つ。だからこそ、悪魔を信じるドニサンのことが案じられてならないのだ。ムヌ＝スグレにとっての「絶望の誘惑」とは、病理現象のひとつの顕れにすぎぬ。この神父を演ずることで作品世界に入り込んだピアラもまた不可知論者であり、その信念に基づいて物語に変更を加えていったのだと思われる。映画の『悪魔の陽の下に』は、原作と異なり、実在する悪魔や、その悪魔との闘いを描いたものではない。そうではなく、不在である悪魔の存在を信じ、それに翻弄される司祭を描いているのだと言えよう。ムヌ＝スグレ神父が、「私が君に期待していることは、君の力を超えた誘惑かもしれんぞ」と語ったとき、ドニサンには悪魔の存在が手に取るように感じられる。とすれば、ドニサンを苦しみ死に追いやったのは、映画ではムヌ＝スグレその人かもしれない。彼はドニサンに対して責任を負わねばならない。物語の最後に、息絶えたドニサンの目を閉じてやるのは、ムヌ＝スグレにおいて外にはないのである。

以上を考え合わせるならば、映画版『悪魔の陽の下に』は、ドニサンやムーシェットの物語というよりは、むしろムヌ＝スグレ神父と、この神父を演じたピアラ自身の物語である、そう断じて差し支えあるまい。

註

- 1) 『悪魔の陽の下に』の参照・引用にはプレイアド版『小説集』収載のテキストを用い (Georges BERNANOS, *Œuvres romanesques complètes*, 2 vol. Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèques de la Pléiade», 2015, t. I, pp. 57-317), 同版のページ数を本文 [] 内に記す。なお訳出にあたっては、山崎庸一郎による邦訳 (『ベルナノス著作集』第1巻, 春秋社, 1976) を参照し, 必要に応じて表記に若干の変更をくわえた。
- 2) Voir Bruno DURIER, «*Sous le soleil de Satan* : de Bernanos à Maurice Pialat ou d'une écriture à l'autre», in *Études bernanosiennes* 20, Paris : Lettres modernes Minard, 1991, p. 65.
- 3) Voir Michel ESTÈVE, «*Sous le soleil de Satan* : du roman au film – note sur le surnaturel et le démoniaque», in *Études bernanosiennes* 20, *ibid.*, p. 91.
- 4) 『田舎司祭の日記』のテキストとしては前掲『小説集』第2巻 (*op. cit.*, t. II pp. 187-425) 収載のそれを使用した。